「笹川杯作文コンクール２０１１」～中国語で応募～ 第２回優秀賞作品

※個人情報保護の観点から、個人名をアルファベット表記しました。
※原文に忠実に和訳しました。

“感情”でものを考える日本人

天津市　劉筱璇

まず、ある日本人の友だちについて話しておきたい。名前はＳＫさん。立命館大学を卒業し、今は天津南開大学の修士課程で、元朝の歴史を専攻している。どうして日本人が中国の歴史にそこまで興味を持って、しかも、はるばる留学までするのだろう？同じ疑問を持つ人は多いと思う。彼女の答えは簡単明瞭だった。「私は草原が好きなのに、日本にはないから。」

自分の好みのため、理性でなく感性でものを考えるのだ。こうした“感情”で考える日本人は多い。小学生の頃から草原に憧れていたからという理由で、毅然として大学の専攻に中国史を選んでしまう彼女のように。中国の子供達はそうではない。中国の子供の多くは、願書を書かされる時に自分がやりたいことなど分かっていないので、何を専攻するのが有利なのか分析するのに両親の助けを借りるのである。自分の未来は、そうやって決めていくのだ。しかし、日本の子供の多くは、Ｋさんのように、自分の好きなものから自分の未来を決めるのである。そのため、学業成績が優秀な息子でも家業のラーメン屋を継ぐため、大学進学を諦めたり、大学卒業を断念したりして父親に弟子入りなどということが起きるのだ。

日本人は、何を行うにせよ、“感情”でものを考えるのが好きである。まず気に掛けるのは、人がどう思うかであって、それが他人であって、自分であっても構わないのだ。

最近「ハガネの女」という日本のドラマを見た。小学校教員が子供達と一緒に成長し、努力していく内容である。劇中でハガネの女教師が言ったある台詞がとても印象に残っている。「子供達の笑顔のために仕事をがんばる！」この台詞を中国の教員が発していたなら、大方「子供達を優れた人材に育て上げるため、仕事をがんばる！」になるだろう。だから、日本人がものを考える時、いつも感情の昇華の方に傾いていると、私は思うのだ。「子供達の笑顔のために」という発想は、子供達を喜ばせなければというだけでなく、感情面で認知を受けたいという自分の感情にも関わっている。

実際、日本人のこうした“感情”でものを考えるという姿勢は、彼らの生活においても貫かれている。店員が心を込めて挨拶をするとか、人の話を聞く時に「はい、はい」と相づちを打って真面目に聞いていることを表すとか、日本に特有の終身雇用制度とか、挙げ句の果てには日本人自身が自慢にする「日本料理は目でも味わうことができるし、口でも味わうことができる」などというものもある。

しかし、感情でものを考える日本民族は、むしろ情に欠ける民族だと自覚していることが多い。

日本の自殺率は世界の中でも最高で、毎年数万人という自殺者が出ている。一般には、社会や家庭から十分な関心や愛情が得られなかったため、自殺という極端な手段で悩みを解決しようという人が出てしまうのだと考えられているが、別の角度から考えてみると、自殺者自身に問題を受け入れる力が不足していて、他人に心の内を訴える術を知らないと言うこともできる。感情を重視し過ぎるあまり、感情面での本のちょっとした挫折が何十倍にも拡大されて映るのである。また、多くの人が傷つけられることを恐れ、自分の本音を隠してしまう。思うに、そういったことが、日本人が自分は情が薄いと思ってしまう原因ではないだろうか。

自分は情が薄いとよく自覚するというのは、感情を重んじることの裏返しである。

実際、日本人の性格の特徴は、多くが“感情”でものを考えるという姿勢に関係すると帰結される。日本人は総じて謙虚な印象を与えるが、実のところ、それは他人を気まずくさせまいという配慮のためなのである。日本人は“土下座”で頼み事をしたり謝罪したりするのを好むが、これも感情で人を動かす方法の一つである。日本人の考えがきめ細かく、細部を重視するのも、他人を傷つけまいとする行為だ。

私の専門は日本文化と何ら縁のない医学だが、日本の言葉や文化にはとても興味がある。身近にいる日本人の友だちを“実験対象”にして、日本人から色々と面白いことを発掘するのも好きである。日本人は慇懃で近寄りがたいと言う人もいるが、実際に触れ合ってみると、こちらが真心を見せれば、“感情”でものを考える日本人はこちらが思うような友だちになってくれる。

もっと多くの中国人が日本を理解し、“感情”でものを考える日本人を理解するようになってくれればと願っている。